

民雄忌～北条民雄を偲ぶ会

北条民雄の忌日12月5日を「民雄忌」と定め、偲ぶ会を開催します。

日時 12月5日(日) 18:00開演

場所 夢ホール(文化会館)

内容 第1部 基調講演「民雄からの架け橋 ～絶望の果てに見える光～」
明治学院大学教授 ドリアン助川さん
第2部 パネルディスカッション
「小説家 北条民雄の軌跡」
パネラー ドリアン助川さんほか
コーディネーター 佐々木義登さん

入場料 無料 ※申込不要 定員 100人

問い合わせ 文化会館 ☎21-0808

北条民雄パネル展

期間 12月19日(日)まで
10:00～16:00(月曜日は除く)

場所 牛岐城趾館 入場料 無料
内容 平成26年に徳島県立文学書道館で開催された文学特別展「北条民雄—いのちを見つめた作家」のパネルを再び展示します。

問い合わせ 文化振興課 ☎22-1798

阿南市の先覚者たち

第4回

郷土の偉人を紹介するために、平成26年阿南市文化協会から「阿南市の先覚者たち第1・2集」が刊行されました。阿南市の発展に尽力された人たちの偉業を顕彰し、後世に語り継ぐために、27人の先覚者たちを奇数月に掲載して紹介します。

いのちを見つめた作家

北条 民雄

北条民雄は、阿南市下大野町、七條林三郎の次男として、父の勤務地であった朝鮮の京城(現ソウル)で生まれる。本名は七條晃司。大正3年生まれ。

生後間もなく母親の病死により、父に連れられて帰国し、七條家の祖父母に預けられた。

大野小学校高等科を卒業後、15歳で単身上京し、葉問屋の住み込み店員や日立製作所亀戸工場の臨時工として働きながら法政中学で学ぶ。

長男であった兄が死亡したので、祖父により郷里に呼び返される。民雄は農業に従事しながら文学に没頭する。

昭和8年、ハンセン病を発病した。徳島で治療していたが良くな

らず、翌年の5月に東京の東村山村の全生病院へ入院した。治療のかたわら執筆活動に励んだ。

全生病院では軽症の患者が重症の患者の世話をするシステムであり、その病院のようすを明らかにしたのが『いのちの初夜』であった。

「人間ではありませんよ。生命です。生命そのもの、いのちそのものなんです。僕の云ふこと、解ってくれますか、尾田さん。あの人達の『人間』はもう死んで亡びて了ったんです。…(『いのちの初夜』より)

作品が発表された当時、不治の病とされており、そのために前記のような表現がなされたのである。

最初、北条民雄は『最初の一夜』と命題していたが、彼の文学の師である川端康成によって『いのちの初夜』に改題された。発表と同時に文壇ばかりでなく、社会的にも大きな反響を呼びその年、第2回文学界賞を受賞し、英・独の2カ国語にも翻訳された。

昭和11年12月『間木老人』『ライ家族』『ライ院記録』などと共に単行本として出版された。北条民雄の生前における唯一の作品集とな



『いのちの初夜』初版本
(湯浅良幸氏蔵)

った。同書はベストセラーとなり、1年足らずで2万冊を売り上げるという当時においては破格であった。軽症者として、重症患者の世話をしながら、彼は文学に打ち込んで、次々と作品を書き続けた。

その過酷な執筆活動の過労からか、慢性の神経症に苦しみ、さらに腸結核に侵され、昭和12年12月5日、23歳の若さで全生病院において死亡した。

死後、川端康成の編集によって『北条民雄全集』(上下2巻)が創元社から刊行された。川端康成は「北条民雄が生きていたら、自分より先にノーベル文学賞を受賞していただろう」と言っていたと伝えられている。

参考資料

「阿南市の先覚者たち 第1集」
平成26年・阿南市文化協会

今回は、「日本初の女性国会議員の一人 紅霞みづ」を紹介します。